

生目古墳群と南九州の古墳文化

皆さんこんにちは。ただ今紹介いただきました宮崎大学の柳沢です。さきほど宮崎市教育委員会の担当の方から、生目古墳群の現在までの調査状況につきましてスライドをごらんいただき、なるほど大変な古墳だなという印象をお持ちになったのではないかと思います。ところで、生目古墳群という名前は関係者はともかく、皆様にはあまり馴染みがないのではないかと思います。これからお話し上げるように、生目古墳群は古墳時代の南九州を代表する大型古墳群ですので、これから大いに売り出して宮崎のシンボルの一つとして活用していただくとありがたいと考えております。

それでは生目古墳群は一体どこにあるんだろうか、発掘調査の際には是非皆様においでいただきたいというお話がありましたけれども、どこに行ったらいいんだろうかということもあろうかと思いますので、まずその位置を確認しておきたいと思います。皆様のお手元にレジユメが渡っていると思いますが、その2ページ目に宮崎市周辺の地図(P8位置図)があると思います。地図の左上の方に生目古墳群という文字が書いてある台地の上に古墳が作られています。宮崎の市街地から大淀川を渡り、北西に5kmほど行ったところで、現在の地名でいえ

宮崎大学教授 柳沢 一男



は^{あとえ}大字跡江、有田行きバス停留所「^{さかのした}坂ノ下」のすぐ横に生目古墳群の看板があります。ところで生目という地名は珍しい名前ですが、もともとこの辺りは旧宮崎郡生目村です。昭和30年代に宮崎市に合併し現在この地名はありませんが、生目村にあった古墳ということでこの名称が付いたようです。地図の下に航空写真(P7全景写真)が入っておりますが、そのように周辺はまだ水田が広がっているのどかなところで、近くには市のスポーツ公園等もあります。行楽のシーズンには是非散策していただければと思います。

生目古墳群は標高2、30mほどの平坦な台地上に古墳が分布しています。レジユメの3ページに生目古墳群の古墳配置図(P9)がありますが、台地上に鍵穴形の黒く塗りつぶしたものと、あるいは丸い点が並んでいる状況がおわかりいただけると

思います。鍵穴形のものが前方後円墳と呼ぶ日本独自の形の古墳です。また凡例についていますが、先程スライドにございました円形周溝墓と呼ぶ弥生時代後期に盛行した墳墓や、あるいは地下式横穴墓と呼ぶ南九州独自の古墳が点々としておるわけです。この古墳群は戦前から知られておりまして、先程ご紹介ありましたように昭和18年に国の史跡に指定されております。残念ながらその後この古墳群の調査はほとんど進んでいませんでしたから、いわば幻の古墳群でありました。宮崎県の古墳と言え、皆さんご承知のように西都市にある西都原古墳群さいとぼるという日本の中学校・高等学校の教科書に登場する大変著名な古墳群があります。南九州の古墳、とくに宮崎の古墳は西都原古墳群が代表しておりまして、その他の古墳についてはあまり名前が出てきませんでした。したがって皆さんが生目古墳群という名前を聞かれた時、まずどこにあるんだろう、そしてどんな内容の古墳群なのだろうと思われるのは当然であろうと思います。

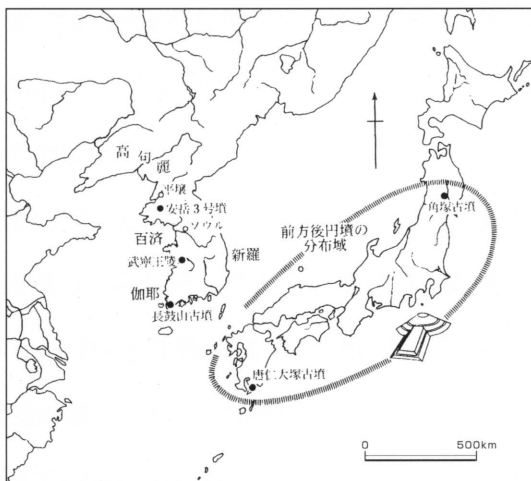
従来南九州の古墳の出現時期につきましては、さほど年代がさかのぼらないのではないか、あまり古い古墳はないのではないかというのが一般的な理解でした。私はこちらに参りまして9年目になりすけども、その2年目に生目古墳群を初めて見学しました。その時の印象というのはもう驚きの一語

に尽きます。これほど巨大な前方後円墳がたくさん連なっている古墳群は、奈良県や大阪府の大和古墳つまり天皇陵古墳が点在しているところを除きますと、他にあまり例を知らなかったことでもあります。3つある大型前方後円墳の墳丘を観察しますと、その形状からはいずれも前期古墳、つまり古墳時代でも古い時期の古墳であろうと直感したからです。従来の考古学の常識では推し量れない古墳群のようだ、そのように感じました。そうして南九州の古墳の出現に関する問題は、根本から見直す必要があるのではないか、そのように考えたわけです。

私のテーマは「古墳時代日向の王と生目古墳群」ということで、生目古墳群にある大型の前方後円墳はどのような意義をもつのか、そして生目古墳群を通じて古墳時代の日向の社会や政治過程はどのように理解できるのでしょうか、というお話を申し上げたいと思います。OHPを使いますのでレジュメの参考にして頂ければと思います。

古墳と古墳群

本論に入る前に、古墳時代はいったいどのような時代なのかということをお話したいと思います。日本では今から2千4、5百年前に本格的な水田稲作が始まりました。現在の日本農業の基盤となる水田稲作とともに、朝鮮半島南部からいろんな技術や文化が入ってきて新しい時代が始まったのです。それから数百年たちますとこの日本列島は、中国王朝を中心とする東アジア世界の中に、倭ないし倭国という名称で登場します。3世紀半ばを過ぎますと、日本各地の政治勢力は次第に大きなまとまりとして編成され、そしてそれぞれの地域の有力な首長達は前方後円墳と呼ぶ巨大な古墳に埋葬されるようになりました。前方後円墳というのは丸い後円部と呼ぶ円丘部と台形の形をした前方部というのがドッキングした形であ



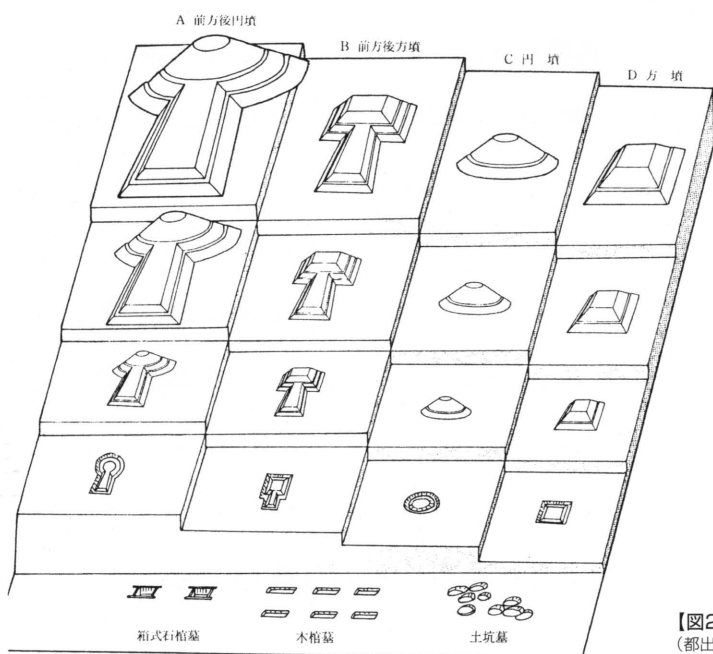
【図1】前方後円墳の分布
(新納泉1989「王と王の交渉」【古代史復元6】)

りまして、日本独自の形態であります。前方後円墳の分布は、図1にありますように、南は鹿児島県の大隅地域、それから北は東北地方の南部岩手県の水沢市というところまで広がっています。10年ほど前までは日本独自の古墳の形と考えられていたのですが、最近では韓国南西部の全羅南道に、大変よく似た古墳が相次いで見つかると、現在12、3あまりの古墳が知られています。と申しましても、朝鮮半島地域の前方後円墳は日本の古墳時代の中期、あるいはそれよりやや新しい時期に作られたようですので、日本の有力な首長達が一部そちらの勢力と親密な政治関係をもった、そうした証しではないかと考えられております。

さて、古墳と申しますと地面に大きな盛り土をもった墳墓を一般的に指しますが、日本各地におそらく20万前後あるのではないかとわれています。古墳にはいろいろな形があります。さきほどの前方後円墳や、珍しいものなのですからけれども前方後方墳と呼ぶものもありますが、一般的に見るのは丸い形の円墳や四角形の方墳です。おそらく日本で作られた古墳のうちの8～9割は円墳と考えられています。前方後円墳の数は現在約5000弱と数が少ないものです。それだけでなく、後に天皇と呼ばれるようになる倭のリーダーたち(大王と呼んでおりますけれども)、あるいは地方の有力なリーダー(首長)といった人々が埋葬され、規模も大きなものが多いの

です。もっとも大きな大阪府の大仙古墳(仁徳天皇陵古墳)では長さが500mを越えるであろうと考えられております。しかし、前方後円墳だからといってすべて巨大というわけではありません。長さが20~30m程度の小型のものもあります。一方、円墳のなかで大きいものは100mを越えますし、方墳でも90m程度のものがあります。一口に古墳といっても様々な形があり、またその規模も大から小までということになります。こうした墳丘の形や規模の違いはいったいどのようなことを意味するのか、大阪大学の都出比呂志さんは10年ほど前に図2のように整理し、次のように説明しています。つまり、多様な墳丘の形というものは古墳に埋葬される人物の家の格式というようなものを、そして古墳の規模は埋葬された人物の生前の実力を示すのではないか、そのように説明されております。

数多くの古墳のなかで、前方後円墳ほどの地方でも最大規模であることが普通です。先ほどお話しした生目古墳群でも大型のものはすべて前方後円墳ですし、西都原古墳群や川南古墳群などでも最大規模の古墳は前方後円墳であります。ということは、前方後円墳こそ、その地域を統括する首長の墳墓である、基本的にそのように考えてよろしいと思います。そしてその当時の最高首長の埋葬された古墳は、500mを越える超巨大なものもありますが、基本的には200m以上の規模のものであります。それに対しまして地域首長の古墳のなかには200mを越えるものもありますが、さほど多くありません。九州でいいますと、最も大きな古墳は西都原古墳群中の女狭穂塚古墳で約180mほどあります。それから生目古墳群で申しますと140mをちょっと越す生目3号墳、そのような古墳がございます。



【図2】古墳の階層性
(都出比呂志1989「古墳が造られた時代」『古代史復元』6)

南九州の古墳と古墳群

それでは、南九州古墳時代の最近の研究動向についてお話します。ひとつは、古墳の出現年代です。従来、南九州の位置というのは当時の政治的な中心地、近畿地方から見れば僻遠の地ですが、南九州の前方後円墳の出現、いかえれば古墳時代の始まりというのはそんなに古くない、古くても4世紀の終わり位だろうと言われていました。ところが先程お話しましたように生目古墳群や西都原古墳群などに何度も足を運んでみますと、どうもそういったことではなくて、古墳時代のかかなり早い段階から古墳が作られたのではないかと考えられるようになったことです。

いまひとつは、南九州には大型前方後円墳がたくさんありますが、これをどのように評価するのか、具体的に議論できるようになったことです。九州の大型古墳の上位10基を表1にまとめておきました。そうしますと、なんとそのうちの8つがこの南九州にあります。上から4番目までは全部宮崎県です。一番上が女狭穂塚おさほづか、男狭穂塚そして生目3号墳と延岡菅原神社古墳。その次に出てくるのは鹿児島県とうじんおおつかの唐人大塚と横瀬大塚古墳よこせおおつか、少なくとも九州で大きな前方後円墳のなんとナンバー6までは全部南九州なのです。表には、古墳名と墳丘の規模、その次に時期という項目があります。そ

100m台となりますと地方ではかなり大きな前方後円墳だなあと、そこにきつと大きな勢力を振って地域を統率したすごいリーダーがいたに違いないと、このように考えるわけです。

このような首長たちの墳墓は前方後円墳や前方後方墳、あるいは大型の円墳や方墳に作られますが、これらを首長墳と呼んでいます。このような首長墳は、ある一定の領域、たとえば地理的・地形的にまとまりのある一定の範囲に数基ないし十数基ほど作られているのが一般的です。そしてそれらは作られた年代が少しずつ違う、大体2、30年ぐらいの年代差があるのが普通です。そうしますと、これらは地域を治めていた首長の代々の古墳であろうと推測されるわけです。これらを首長墳系譜と呼んでいます。その系譜が始まる時期や終わる時期に地域の間で違いがありますし、首長墳系譜を構成する古墳の規模にも大きな違いがあります。このような首長墳系譜の消長、つまり移り変わりは、その地域の政治的動向を鋭く反映しているのではないかと考えられるのです。その違いを比較することによって日本各地の政治勢力の動向を探ってみる、そして大王の墳墓群と比較してみる。それらを比較検証することによって、地方の社会の様子や政治的動向がわずかながらですが見えてくるのではないかと思います。

【表1】九州の大型古墳上位10基

古墳名	規模	時期	墳形
1. 宮崎・女狭穂塚	178m	5前	仲津山類型
2. 宮崎・男狭穂塚	160m	5前	帆立貝形
3. 宮崎・生目3号	143m	4中	渋谷向山類型
4. 鹿児島・唐仁大塚	140m	5初	柄鏡形c類型
5. 鹿児島・横瀬大塚	140m	5後	大仙類型
6. 宮崎・菅原神社	(140m)	4末	柄鏡形類型
7. 福岡・岩戸山	138m	6前	
8. 宮崎・生目1号	130m	3末	箸墓類型
9. 宮崎・持田1号	120m	4末	柄鏡形b類型
10. 大分・小熊山	118m	4前	行燈山類型

※菅原神社古墳の墳丘規模は推定

こには5の前や後と書いてありますが、これは5世紀の前半代に作られた、あるいは後半代に作られたということを示しています。そして最後に墳形という項目がありますが、前方後円墳の墳丘の形ですが、詳しいことは後ほどお話したいと思います。このような大きな前方後円墳が南九州になんで集中するのでしょうか。先程私は前方後円墳の規模というのは、古墳に埋葬された人物の生前の実力を示すと申しましたが、そうであるならば九州で最大の実力者というのはみんな南九州にいたのかという事になってしまいます。本当はそう考えたいのですが、この辺りは数字の魔術のようなもので、ただちにそのように断言する事はできないのですけれども、かなり有力な政治勢力が盤踞していた、そのことは間違いのないようであります。

生目古墳群の大型古墳と 築造年代

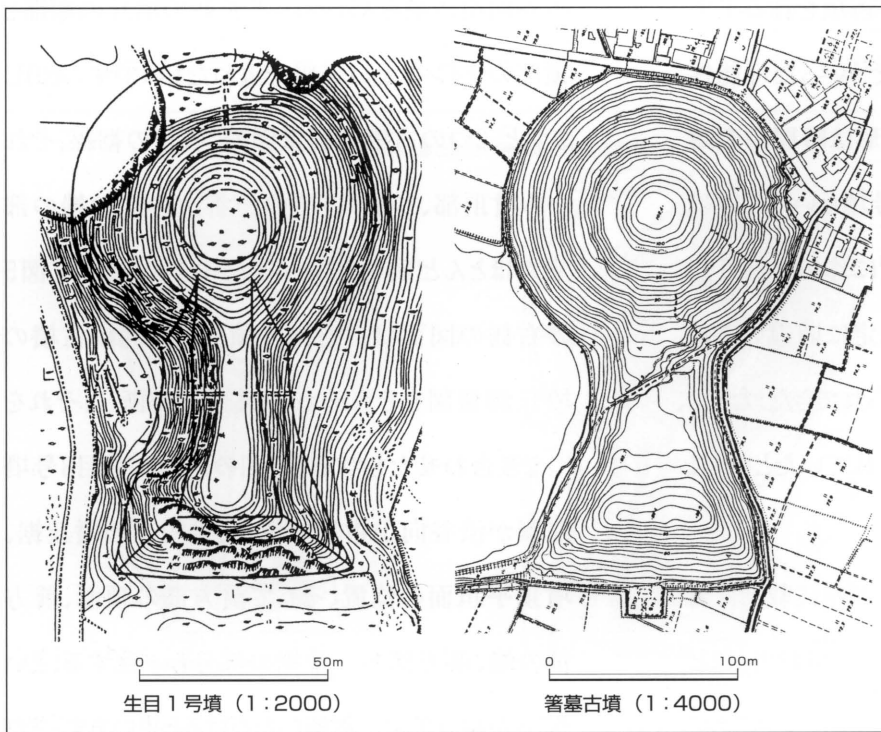
それでは始めに、南九州でも非常に早い時代から前方後円墳が登場していたのではないかという証拠を探ってみたいと思います。レジュメの6ページに生目古墳群にある7つの前方後円墳の墳丘測量図が載っていますが、生目古墳群には墳丘の長さが100mを超える3つの大型前方後円墳があります。私が生目古墳群を歩いて最初に驚きましたのは、3号墳という長さが140mほどの古墳です。規模だけではなく、大変古い時代の墳丘の形をしていたからです。また、その北側にある1号墳(図3左)にも驚かされました。残念ながら昭和4、50年代頃に前方部の裾が削られていまして、現在このような姿は見る事はできません。この図面は昭和16年頃に原田仁という優れた測量士が測量したもので、信頼性は高いと考えております。私は古墳見学後にこの測量図の存在を知ったのですが、これを見て大変驚きました。何故かといいますと、前方部の平面形が三味線の撥のように先端が広がっていたからです。撥形に開く前方部の形というのは、現在日本で最も古い大型の前方後円墳として知られている奈良県はしはかの箸墓古墳と言う古墳がございますが、その古墳の前方部の形態とそっくりなのです。全体の形状を見ましても古墳時

代前期でもかなり早い段階であるというのが容易に推察できるのであります。それからもう一つ、古墳群の南端近くに22号墳と呼んでいる前方後円墳があります。残念ながら現在道路で前方部の途中が切られているのですが、全長117mほどで、大変に特徴的な形をしています。どこが特徴的かと言いますと、後円部の直径に対しまして前方部が非常に長い。このような形状のものを宮崎ではこれまでえかがみ柄鏡式古墳、あるいは柄鏡式前方後円墳と呼んできています。

次にこれらの大型前方後円墳はいつ頃作られたものか、先ほどの墳形に絡めながらお話ししたいと思います。

まず生目1号墳から見てみます。1号墳の測量

図(図3左)は戦前に作られたもので、前方部の形状がしっかり残っております。生目1号墳の後円部は正円でなく楕円形の変則形ですが、墳丘の長さは約130mあります。この1号墳とよく似た前方後円墳を探しますと、奈良県箸墓古墳にたどり着きます。図3の右の図面は奈良県の箸墓古墳の測量図です。箸墓古墳は先ほど申したように3世紀中頃から後半に作られたと考えられている日本で最も古い巨大前方後円墳で、墳丘の長さは約280m、高さも20数mあります。大変大きいですね。この2つの古墳の測量図を比べますと、先端に向かって撥形に開く前方部のラインが特徴的ですが、この2つの古墳の場合、左右逆転させると瓜二つということがわかります。平面図の左右を逆転し、つまり裏表にして



【図3】生目1号墳と箸墓古墳

合わせますとほとんど重なるのです。それだけではなくて、生目1号墳の楕円形をした後円部の平面形を正円形に修正しますと墳丘の長さは約140mになりますから、生目1号墳の墳丘規模は箸墓古墳の2分の1ではないかという予想がたちます。そこで、生目1号墳の測量図の上に、箸墓古墳の測量図を2分の1に縮小した時の墳丘裾部のラインを左右逆転して太い線で記入してみますと、図3左のように、見事に墳丘裾部が重なります。

ということは、生目1号墳は箸墓古墳の2分の1の大きさに設計されて作られた可能性が極めて高いことを示しています。つまり、生目1号墳は箸墓古墳をモデルにして作られたのではないか。しかし設計図だけではこれまで見たこともない古墳を作ることはできません。おそらく古墳を作る工人達が王権から派遣されて作る、そういった可能性があるわけです。前方後円墳の形は時間の変遷とともに変化しますから、生目1号墳という古墳は箸墓古墳とさほど違わない年代に作られた可能性が極めて高いのです。この推定に間違いがなければ、南九州でもこれまで考えられてきた以上に、早い時期から前方後円墳が作られていたということになるでしょう。

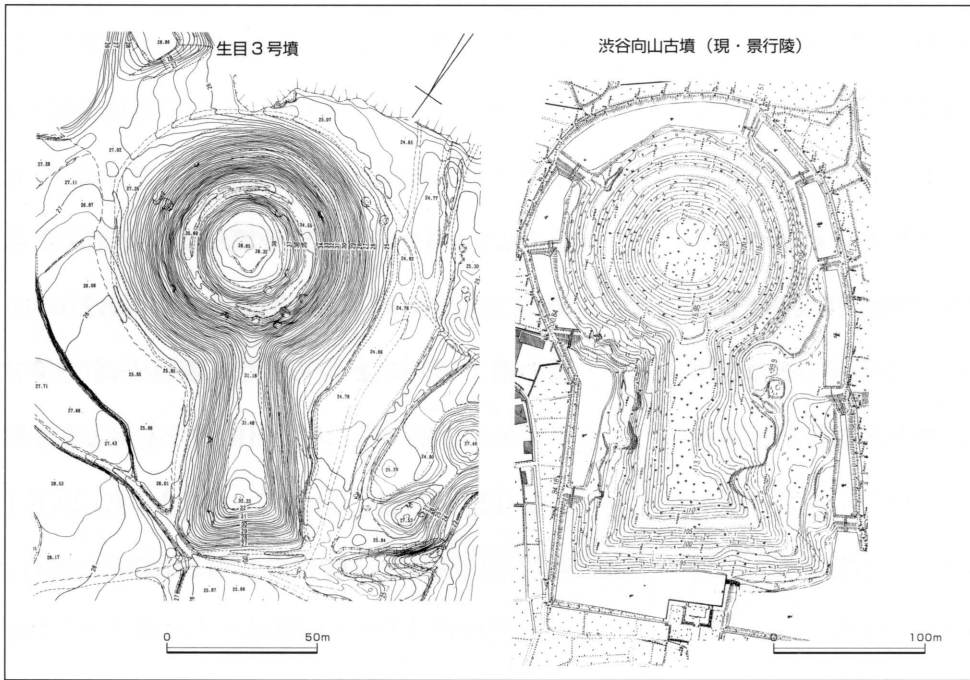
次に3号墳。墳丘測量図を図4の左に載せておきます。墳丘の長さ約140mあまり、高さは12mほどです。これとよく似た古墳はないだろうかということで、

大王墳級の前方後円墳を探索してみますと候補しふたにむかいやまがありました。奈良県天理市にある渋谷向山古墳けい(景行天皇陵古墳)と呼んでいる巨大な前方後円墳(図4の右)です。墳丘の長さは約300mともいわれていますが、前方部先端の段は古墳の墳丘ではなく墳丘を作るための基壇のようなものと考えられます。ですからこれをのぞきますと墳丘の長さは280mと、生目3号墳の約2倍の規模となることが分かります。言い換えますと、生目3号墳は渋谷向山古墳のほぼ2分の1となります。

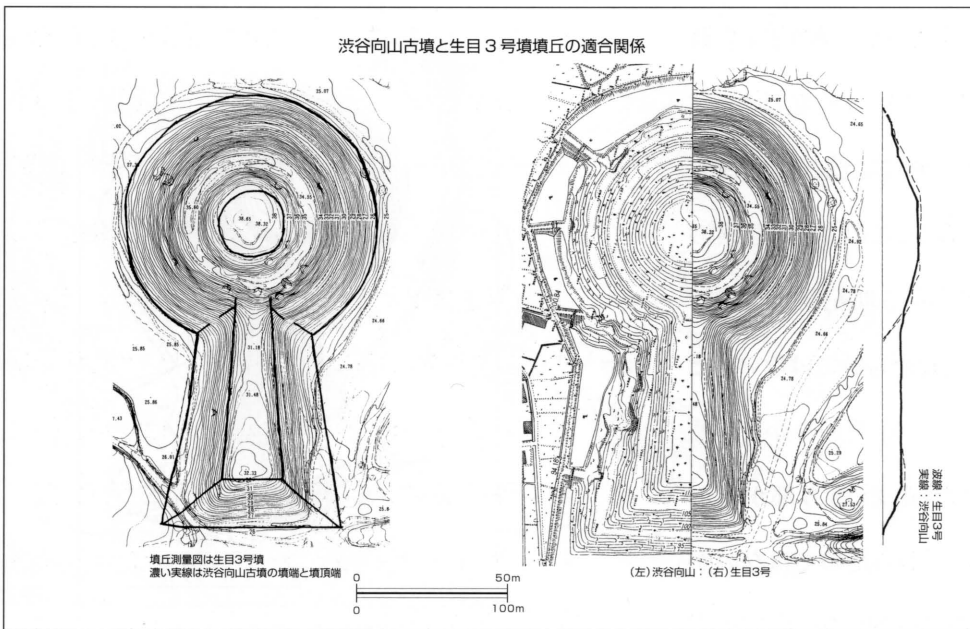
次をお願いします。墳丘モデルになる別の古墳を特定するために、いろいろな方法で検証するわけですが、図5はその2つの作業結果を示しています。左側の図面は、生目3号墳の墳丘測量図の上に、渋谷向山古墳を2分の1にした時の墳丘の裾部と頂部のラインを太い実線で重ねたものです。そうしますと、2つの古墳の測量図の、墳丘の裾線、それから墳頂部、つまり古墳の一番上の面の端の部分がほとんど重なることがわかります。そして図5の右側の図面は、生目3号墳と渋谷向山古墳の墳丘測量図をそれぞれ中央部で切断し、それをつなぎ合わせたものです。図の右側が生目3号墳、左側が渋谷向山古墳ですが、後円部の墳丘裾、墳頂平坦面の位置、そして前方部の頂面、前方部の端、前方部の一番裾の部分も一致する、ということが視覚的にご理解いただけるとと思います。また、

墳丘の立面形で比較するとどうなるかということで、
 図5の一番右に2つの古墳の断面図を重ねてみ
 ました。太く濃い線が渋谷向山古墳、波線が生目
 3号墳です。細部に多少の違いがありますが、ほ

とんど一致することがわかります。つまり生目3号墳
 は平面形も立面形も、ともに渋谷向山古墳の2分
 の1の大きさの相似形ということが出来ます。このよ
 うな関係を相似墳と呼んでいます。まず渋谷向



【図4】
 生目3号墳と渋谷向山古墳



【図5】
 渋谷向山古墳と
 生目3号墳墳丘の適合関係

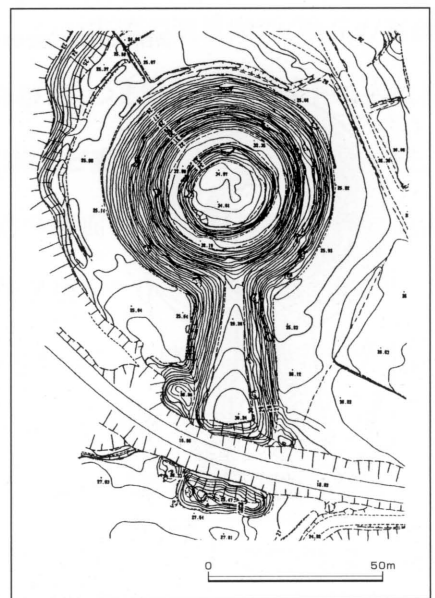
山古墳の設計図のようなものがあって、その2分の1にした設計図をもとにして生目3号墳が作られた可能性がきわめて高いのです。この場合、生目1号墳と同じように王権直属の墓作り集団がこの地に派遣され、地元の工人達をリードしながら作った可能性が非常に高いと考えるべきでありましょう。

次に、22号墳(図6)を見てみたいと思います。この古墳の形は前方部が非常に細長いのが特徴です。平成7年度に宮崎市教育委員会の手で部分的な発掘調査が行われておりまして、壺形埴輪と呼ぶ土製品が見つかっています。その形の特徴から見て、およそ4世紀の終わり頃につくられたものと推測しています。今のところ、生目古墳群の大型前方後円墳のなかで、出土遺物から年代が推測できる唯一の古墳でもあります。

さて、宮崎県内にはこのような前方部が細長い特徴をもった前方後円墳がたくさんあります。柄鏡式古墳と呼ばれることもあります。私はこのような墳丘の形をえかがみがたるいけい柄鏡形類型と呼ぶことにしています。詳細は後ほどお話ししますが、このような形態の前方後円墳は4世紀後半から5世紀初め頃までのごく限られた時代に作られたものではないかと考えています。このような短い時間のなかでも柄鏡形の墳形は変化していたらしく、前方部が高いものから低いものへ変わっていったのではないかと推定していますが、生目22号墳はその中間的な

形態です。

以上申し上げてきた生目古墳群の3基の大型前方後円墳は、1号墳、3号墳、22号墳の順に作られたと推測されます。それぞれの古墳が作られた年代は、今後の調査によって確定すべきと思いますが、今のところ1号墳がおおよそ3世紀後半から4世紀までの間に、3号墳は4世紀中頃前後に、22号墳は4世紀終わり頃に作られたのではないかと推測しております。ただ1号墳と3号墳が作られた間に、14号墳と呼ぶ墳丘の長さが60mあまりの中型の前方後円墳が作られた可能性があります。いずれにしても、大淀川流域を基盤とする有力な首長墳系譜と認めることができます。とくに1号墳と3号墳は、同時代の古墳と比較した場合、宮崎県内だけでなく九州最大の規模とって間違いないようです。何故、この地にこのような大型



【図6】生目22号墳(1:2000)

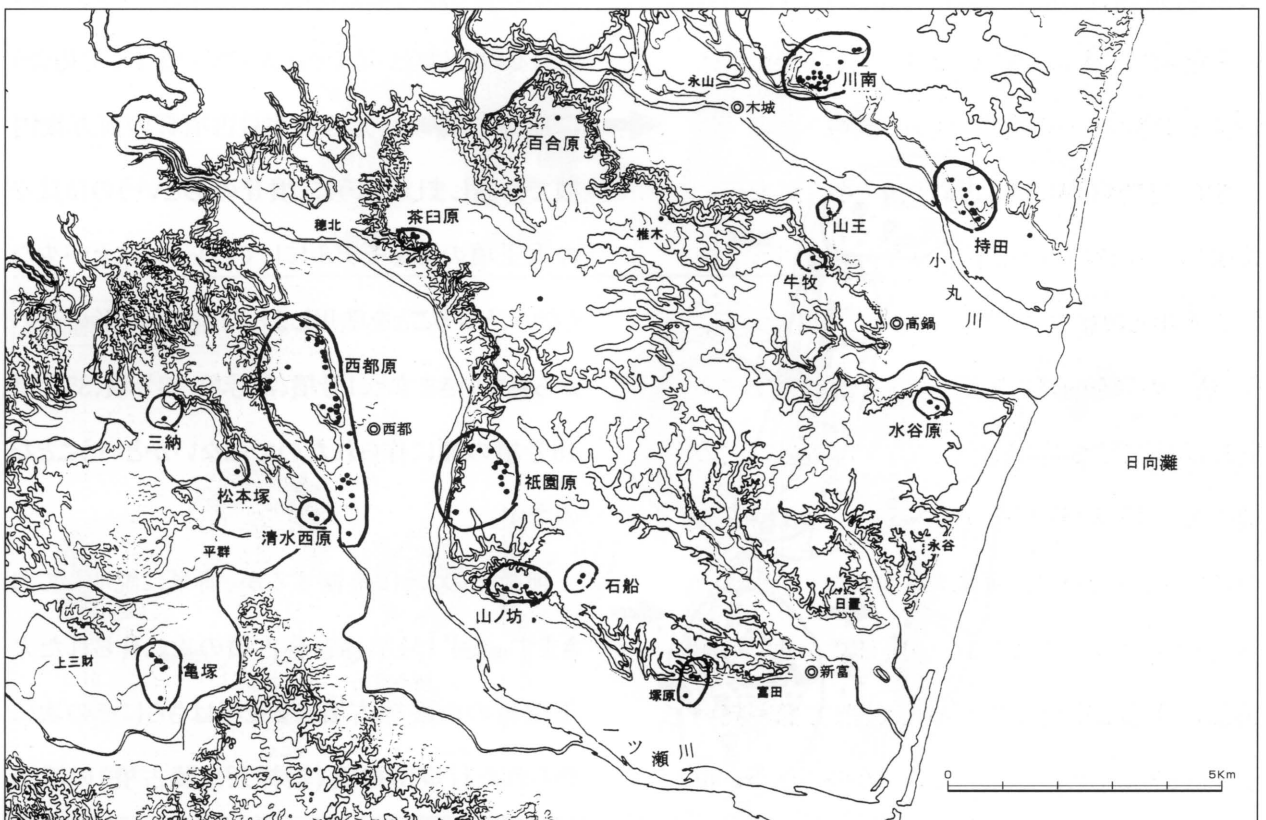
古墳が築造されたのか、私にはそれに答える成案を持ち合わせておりませんので、後のシンポジウムで先生方のご意見をいただければと思います。

がありますが、この2つの流域には数多くの古墳群が知られています(図7)。

小丸川流域には持田古墳群や川南古墳群が、また一ツ瀬川流域には西都原古墳群や祇園原古墳群など南九州有数の大型古墳群が群集しています。そのなかでも皆さんご承知の西都原古墳群は早くから発掘調査が行われ、また現在宮崎県教育委員会によって発掘調査が進行中で、もっとも古墳群の内容が判明しています。それだけでなく、生目古墳群と同時期に作られたと思われる前方後円墳がたくさんありますから、まずは西都原古墳群の内容を検討した上で、比較してみたいと思います。

西都原古墳群の首長墳系譜

これまでお話してきた生目古墳群の大型前方後円墳は、南九州の他の地域と比較すると、どのように位置づけられるか、という問題を考えてみます。この場合、同時代の古墳がたくさん作られた宮崎平野北部と比較してみるのが有効です。この平野北部には一ツ瀬川とその北側を流れる小丸川



【図7】宮崎平野北部の主要古墳群と前方後円墳(黒丸は前方後円墳)

西都原古墳群は、一ツ瀬川右岸の台地上から沖積微高地にかけての広範囲に分布し、現在311基の古墳が国特別史跡に指定されています。そのうちの30基の古墳が大正初期に発掘調査されています。西都原古墳群は広域にわたりますので、群の中心的な分布域といえる西都原台地上の分布図を図8に示しておきました。

西都原古墳群には31基の前方後円墳がありますが、その大半は古墳時代でも前期から中期の初め頃(4~5世紀前半)に作られたものです。31基というのは大変な数なのですが、それらが分布する場所は全体的に満遍なく広がっているのではなくて、7つほどのグループに分かれること



【図8】西都原古墳群分布図(西都原台地上)

がわかります。それぞれのグループの名称がありませんので、仮にAからG群としておきますが、各グループの関係はどのようなものであったのでしょうか。それにはまず、それぞれのグループの前方後円墳がいつ頃作られたのかということ、ある程度確定させる必要があります。

まず、仮にA群としたグループにある前方後円墳とその築造順序を考えてみたいと思います。A群というのは、図8の西都原古墳群分布図の右下よりある一群ですが、全部で6つの前方後円墳がございすけれども、一番小さいものは形がよくわかりませんのでそれを省きますと、5つの前方後円墳の作られた順番は図9の上を示したようになるのではないかと推測しています。そのように推測するのは、先程の生目古墳群の前方後円墳でお話したように、墳丘の形というのは代々の大王墳の形をモデルにして作られることが少なくない、ということ為準用しました。墳丘の形の違から見ていきますと、1号墳、72号墳、13号墳、35号墳、46号墳の順に作られたのではないかとこのことです。

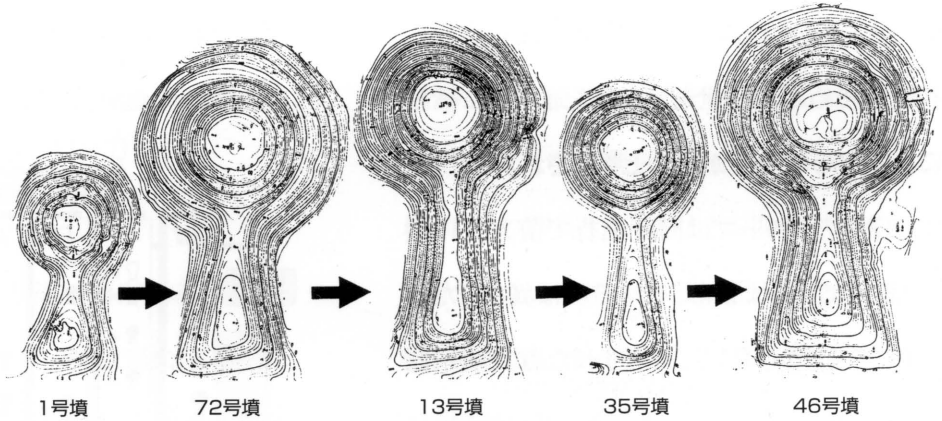
何故そのように推測するか、簡単に説明しておきます。まず1号墳は箸墓古墳の次に作られた大にしとのづか王墳級の西殿塚古墳、72号墳はさらにその次にあんどんやま作られた行燈山古墳(崇神天皇陵古墳)の墳形すじんを基本モデルにしている可能性が高いと判断して

います。また46号墳は奈良盆地北部にある大王墳クラスさきみさきやまの佐紀陵山古墳の墳形そのもので、4世紀末頃に作られたと考えると良いものです。13号墳と35号墳は先ほど申し上げた柄鏡形類型の墳形ですが、形態にわずかな違いがあります。幸い、大正年間の発掘調査と最近になって宮崎県教育委員会が行った発掘調査の成果を検討しますと、13号墳の方が先行して作られたと推測されます。35号墳はおそらく生目22号墳よりもやや遅れて作

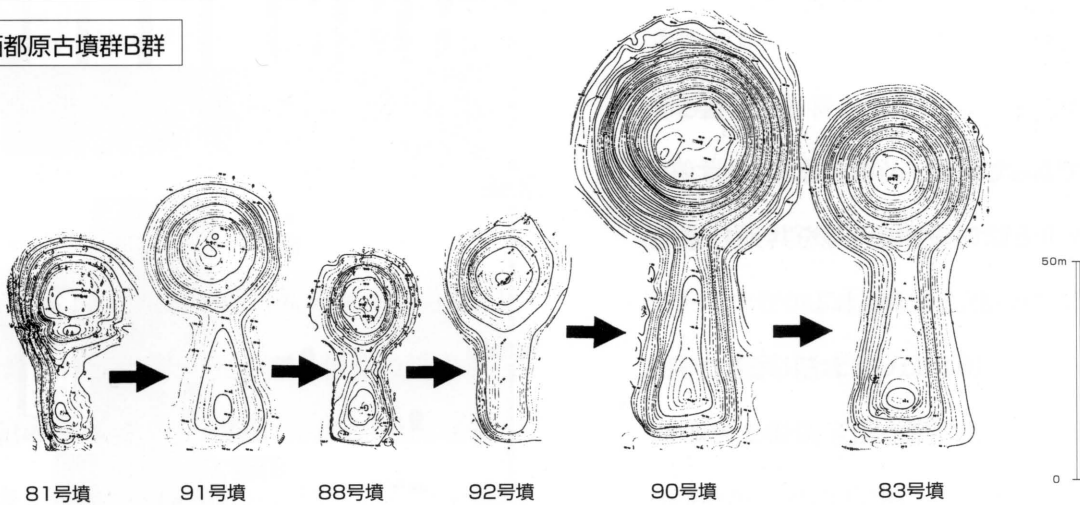
られたものでしょう。それらを総合しますと、先のような築造順序となるわけです。この推測に間違いなければ、A群の前方後円墳は4世紀前後から5世紀前後までの約100年間にわたって作られたもので、5世代の連続する首長墳と理解できるのではないかと考えています。

同じような方法でB群を見てまいりますと、個々の古墳の説明は省きますが図9の下の図面のような順番で作られたのではないかと推測されるのです。

西都原古墳群A群



西都原古墳群B群



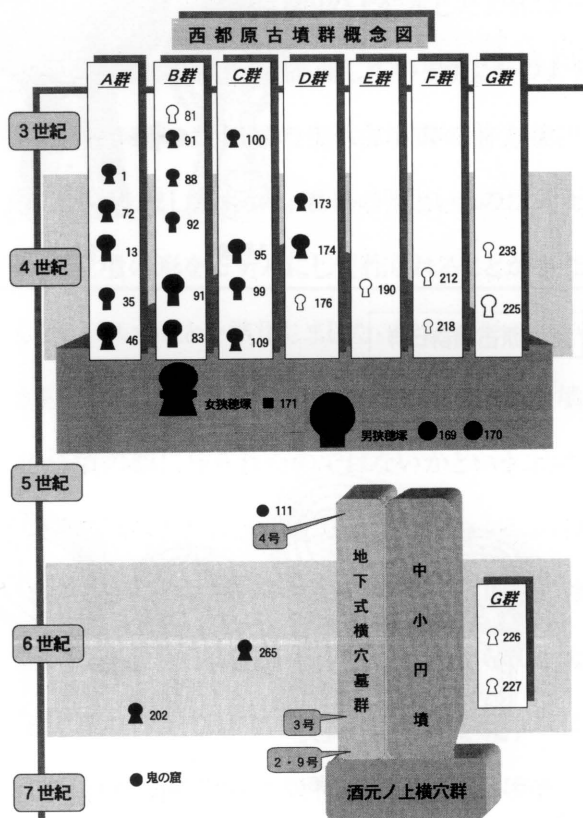
【図9】西都原古墳群A群・B群前方後円墳の築造推移

このB群のなかにも柄鏡形の前方後円墳が2基ございますが、A群同様に作られた時期に先後関係が認められます。またこのグループの場合、A群よりも早く3世紀半ばないし後葉から前方後円墳が作られ始め、4世紀末葉には築造を停止したことが推測されるのです。

C群からG群までの前方後円墳の検討結果は省略しますが、前方後円墳の墳丘の形から見ますと、各グループ内での築造順序が大まかですが推測可能です。各グループ内の前方後円墳の数に違いはありますが、いずれも古墳時代の前期から中期の初めごろ(4世紀～5世紀前半)に継続的に作られた可能性が高いと判断されました。つまりこの7つのグループは同時進行で前方後円墳を作り続けていますから、それぞれは異なった築造主体(首長勢力)によって営まれた首長墳系譜であることを示しています。もしそうだとすると、これらの首長墳群を営んだグループは、一ツ瀬川本流や支流沿いに広がる広大な農耕地を基盤とする政治勢力であって、おそらく祖先を共通とするような関係を媒介として一つの台地を共通の墓地域としたのではないかと推測されるのです。

次お願いします。図10はいまお話ししました5世紀前半以前の首長墳系譜の相互関係と、その後の展開を整理して西都原古墳群の築造過程をモデル化したものです。古墳時代前期から中期初

め頃までの西都原古墳群は、首長墳系譜ごとに前方後円墳が作られています、それを年代順に並べてみますと図の上半部のようになるのではないかと思います。これに対しまして、5世紀前半以後の展開はまさに激動的で、また後でお話しますが、5世紀前半のところに記入しているように、突如、九州最大規模の女狭穂塚古墳やそれにつぐ男狭穂塚古墳が、A～G群の首長墳系譜での前方後円墳の築造が終わった直後に登場します。このことは、女狭穂塚古墳はそれまで分散していた一ツ瀬川流域の諸勢力が統一を果たした後に、新たな巨大な勢力が生まれたことを推測させるも



【図10】西都原古墳群の形成過程モデル

のではないのでしょうか。

以上のように女狭穂塚古墳が登場するまでの西都原古墳群の築造過程を推測するのですが、生目古墳群に巨大な1号墳や3号墳が作られた時期に限りますと、西都原古墳群の前方後円墳の墳丘規模はいずれも100m以下で、生目古墳群との格差はかなり大きいことが分かります。西都原以外の古墳群でも同様ですから、生目古墳群の首長の勢力がいかに突出したものであったか推測されるとおもいます。

柄鏡形類型前方後円墳が語る社会

次に柄鏡形類型の前方後円墳が語る社会についてお話したいと思います。柄鏡形の墳形をした前方後円墳は、生目22号墳で簡単にお話しましたが前方部の平面形が非常に細長い形態のもので、このような墳形の前方後円墳は全国的にもあまり例がありませんが、南九州にはOHP(図11)に示していますように、たくさんのが知られています。この柄鏡形前方後円墳が作られた時期は、先ほど申し上げたように4世紀の後半から5世紀の初め頃までの限られた年代です。その頃の南九州では柄鏡形以外の墳丘の前方後円墳は基本的にないといってもよいぐらいです。基本

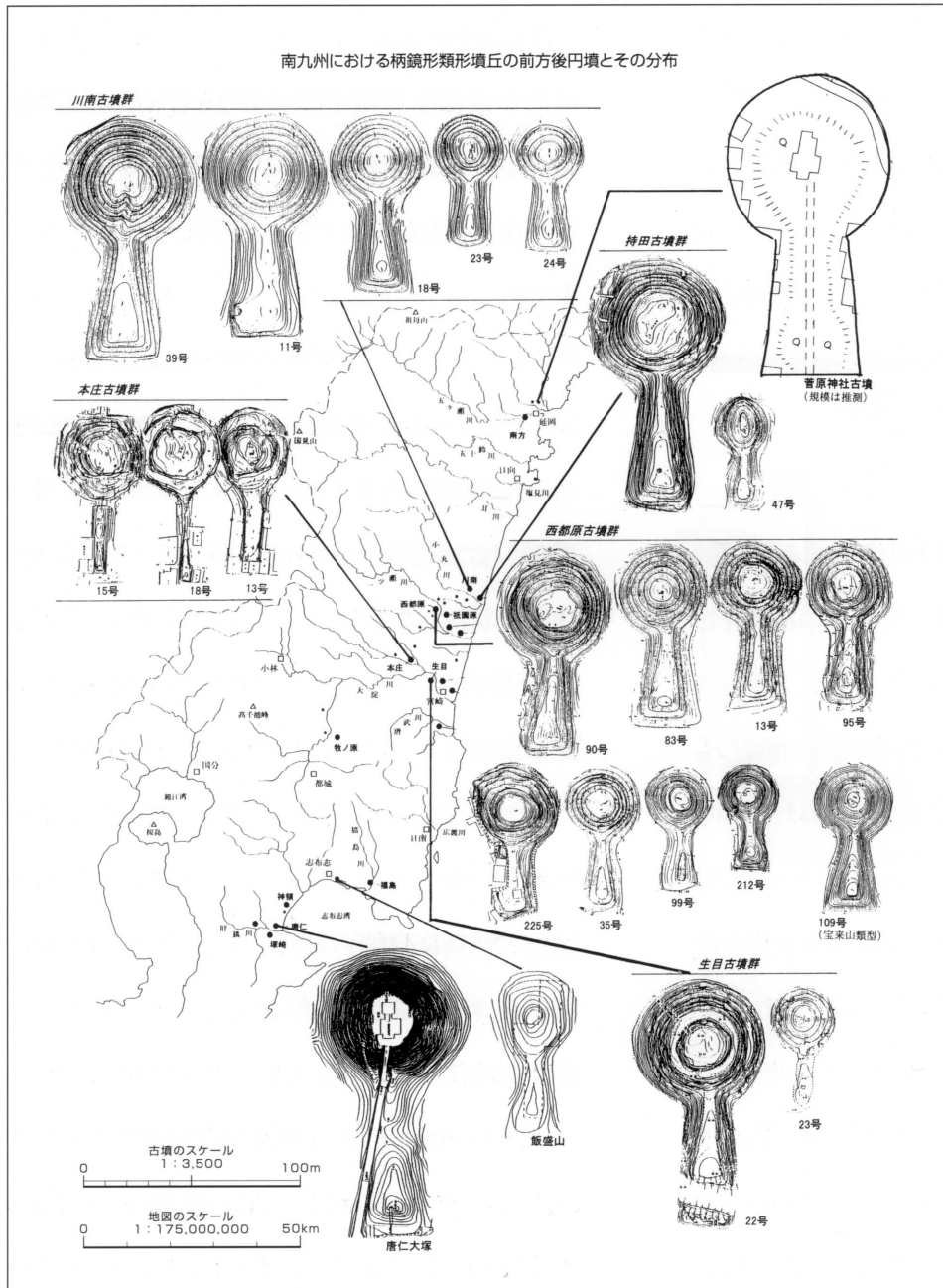
的にないということは多少の例外があるわけですし、鹿児島県の塚崎古墳群や宮崎県の西都原古墳群に奈良盆地北部に作られた大王墳をモデルとする墳形が少数ありますが、これらの例外を除いて柄鏡形の前方後円墳が圧倒的に多いということです。

柄鏡形の墳形が出現するまで、南九州の有力な首長が採用した前方後円墳の墳形は、生目古墳群や西都原古墳群でお話をしましたように、箸墓古墳や西殿塚古墳、あるいは行燈山古墳や渋谷向山古墳などの大王墳の相似墳か、それらを多少アレンジした墳形が多いと考えています。つまりその折々の大王墳の墳形をベースとした古墳が次々に作られていたと判断しています。このことは、南九州日向の首長と大王勢力との関係が親密で、代々更新された大王墳の墳形情報が次々にもたらされるような状況にあったと考えてよいと思います。しかし4世紀後半になると、大王墳の墳形と異なった柄鏡形前方後円墳が出現したのです。ただそれだけでなく、宮崎県・鹿児島県の有力な首長墳は柄鏡形の墳形を共有しています。このことは、王権と南九州の首長間に関係に以前のような親密な関係が一時的に弱まったことを示すのではないかと、親密な関係にヒビが入るような出来事があったのかもしれない。そうした危機的状況を克服するために、以前から何らかのつながりがあった南九州の首長層が結束力を高めるために、こぞってこの

墳形を採用した可能性も想定されてよいと思います。

一方、生目古墳群を営んだ勢力を考えますと、この時期は大きな転換点であったようです。何故かと申しますと、この時期、生目古墳群には22号墳という大型前方後円墳がありますが、ほぼ同時期

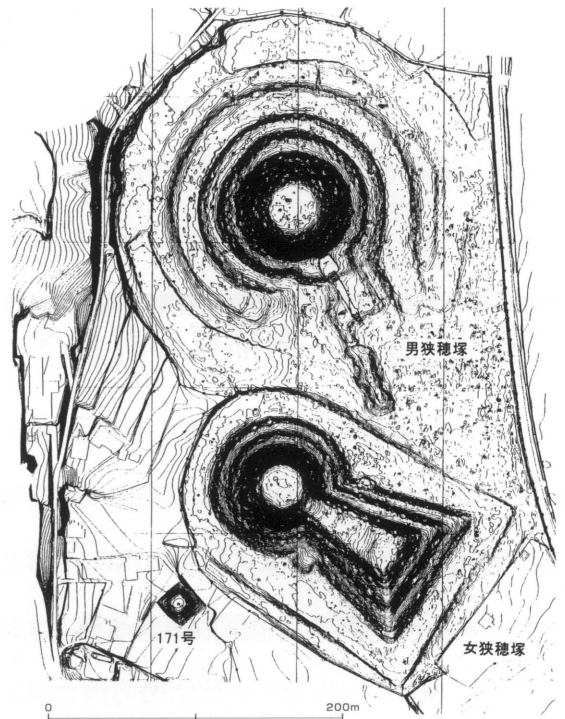
にそれよりもさらに大きな古墳が宮崎平野部以外に出現しています。宮崎県北部・延岡の五ヶ瀬川ごかせの流域に墳丘の長さが140m前後の菅原神社古墳が、またやや遅れて5世紀の初め頃に大隅の志布志湾沿岸域に同様に墳長140mの唐仁大塚古



【図11】南九州における柄鏡形類型墳丘の前方後円墳とその分布

墳が作られているのです。柄鏡形の前方後円墳が主流となった時期になると、生目古墳群の勢力は南九州最大規模の古墳を営むことができず、首長連合に占める地位がかなり低下したのではないかと、そのように推測しています。ひょっとしたら、南九州首長連合を代表する盟主的地位は、すでに他の地域の大型前方後円墳を営んだ首長勢力に移動してしまったのかもしれませんが。このように盟主的地位が頻繁に移動するのは、生目勢力の衰退にともなって南九州の政治情勢がやや混乱したことを示すのかもしれませんが。

さて、このような柄鏡形の前方後円墳の次に登場したのが、女狭穂塚・男狭穂塚古墳の2つの古墳(図12)です。女狭穂塚古墳は墳丘の長さ176m、高さ15m、九州最大規模の前方後円墳です。墳丘の周囲に周堀と土塁が巡っていますが、最近の県教育委員会の調査によりまして、この土塁のさらに外側にもう一つの周堀が巡ることがわかりました。2重の周堀の外側には171号墳と呼んでいはいちよる陪冢(首長の臣下の墓)が作られています。また女狭穂塚古墳の北側には男狭穂塚古墳があります。これもたいへん大きい古墳ですが、前方部は非常に小さなものほたてがいがたで帆立貝形古墳、あるいは造出し付き円墳と呼ぶ墳形です。この造出し部を含めた墳丘の長さは160mあります。一口に160mといっても非常に大規模なもので、この種の古墳



【図12】女狭穂塚と男狭穂塚古墳

としては日本最大規模のものです。この2つの古墳は陵墓参考地として宮内庁が管理しておりますから、発掘調査はおろか私たちが内部に入って古墳を見学することもできませんが、宮内庁におられる考古学研究者の方々がそこから採集された埴輪などの報告をまとめられておりますので、古墳が作られたおおよその年代を知ることができます。また最近、宮崎県教育委員会が宮内庁の許可をいただいて高精度の測量図を作成していますから、墳丘の形からもいろいろなことがわかります。結論だけを申しますと、女狭穂塚古墳は大阪府藤井寺市にありなかつます仲津山古墳の相似墳で、その5分の3の規模に作られたものです。築造年代はおおよそ5世紀前半と考えられています。この仲津山古墳は、それまで奈良盆地

に営々と作られてきた大王墳が、大阪平野に墓地を移動した後に最初に作られた大型の大王墳というところをご記憶いただきたいと思います。

生目の首長から西都原の首長へ

それはさておきまして、問題は男狭穂塚・女狭穂塚古墳という2つの巨大古墳の登場は何を物語るのでしょうか。この巨大古墳の出現は、先ほど申しましたように西都原古墳群の形成過程では大きな画期となるもので、新しい政治勢力の台頭を意味すると考えられます。また、私の基調報告の主題であります生目古墳群の大型前方後円墳群の消長を考える上でもきわめて重要な出来事といわねばなりません。

繰り返しになりますが、生目古墳群の1号墳や3号墳は古墳時代前期でいえば南九州最大、九州最大の規模を誇ります。さらに、西日本でも吉備地方(岡山県)以西の地域では、同時代の前方後円墳としては最大規模ということです。つまり、生目古墳群の1号墳、3号墳に埋葬された首長は、もしその規模がそのとおり実力を示すとすれば、岡山県以西最大を誇った政治勢力首長だったと、そのようにいっても過言ではないかもしれません。ところがこの生目古墳群を営んだ勢力も5世紀を前後する時期には衰退し、西都原古墳群の女狭穂塚古

墳の首長を盟主に仰ぐ勢力にとって代わられるわけです。ここに、南九州をめぐる大きな政治的な変動が読みとれるのではないかと考えています。それでは、このような政治的変動はどのように考えるべきでなのでしょう。

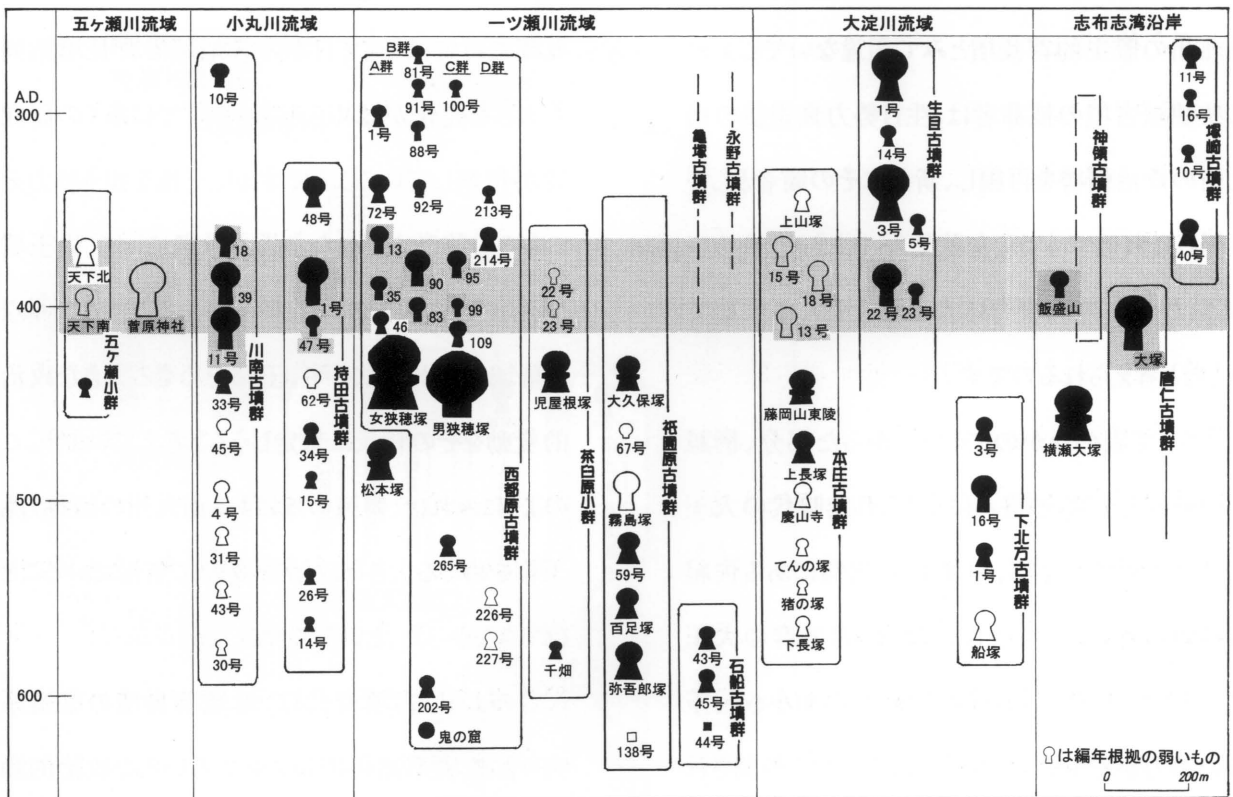
図13の南九州主要首長墳系譜の編年をご覧ください。このあとのシンポジウムで一緒に石野先生がおまとめになった『全国古墳編年集成』という本がありますが、この編年表はそのなかの宮崎・南九州版の最新バージョンのつもりで新たに作成したものです。問題はこれをどのように解釈するか、言い換えますと、南九州と日本(倭)の政治過程と政治構造をどのように理解するかということです。ただ今回のシンポジウムは生目古墳群を中心としていますから、以後の話はこの表の上半部が対象となります。

まずこの表から南九州に前方後円墳が登場するのは3世紀の後半位にあって、その後、紆余曲折しながら6・7世紀の境目ぐらまでの約300年強のあいだ継続して作られ続けたことがお分かりいただけると思います。図面の右下にスケールが入っておりますので、それぞれの古墳の大きさの比較ができます。そうしますと3世紀の後半から4世紀の半ば過ぎまでは、大淀川流域の生目古墳群にある前方後円墳が他の地域のものよりも圧倒的に大きいことが分かります。つまり古墳時代の始ま

りから前期中葉までの間、南九州最大規模の前方後円墳は一貫して生目古墳群のなかに作られ続けられたのです。このことは生目の首長が南九州諸勢力のなかで突出した勢力をもったというだけでなく、生目首長を盟主とする諸地域の首長層の結集体(南九州首長連合としておきます)の盟主たる大首長として振る舞った可能性が高いと考えています。

4世紀の後半から5世紀の初めまで時期のところにアミをかけておきましたが、この時期は柄鏡形の前方後円墳が盛行した時期であります。繰り返すようですが、柄鏡形の前方後円墳はこの時間

帯のなかでしか作られていません。つまりこの頃の南九州の首長層は、旧来の大王の墳形をベースに前方後円墳を作り続けた体制から離れて新たな墳形を模索し、ついには柄鏡形というやや特殊ともいえる墳形を創出したのです。その契機がどのようなものであったのか判然としませんが、宮崎・鹿児島県各地域の首長墳が特異な墳形を共有する背景に、首長層の結集があったことを改めて示していると思います。しかしながら先ほどお話したように、この段階の南九州における生目勢力の相対的地位の低下は免れることができなかったのでしょうし、盟主的地位の度重なる移動は政治的安定性を欠



【図13】南九州の主要首長墳系譜の編年

いていた時代であった、と言い換えることができる
かもしれません。

その後5世紀前半に、九州最大、吉備以西の
最大規模の前方後円墳が西都原に出現します。
女狭穂塚古墳です。この古墳の墳形や規模は、
先ほどお話ししたように同時代の大王墳・仲津山古
墳の5分の3の相似墳です。それだけでなく、2重
の周堀や陪冢をともない、また最新の埴輪を取り
入れるなど、王権直属の古墳築造集団が積極的
に関わったとみて間違いありません。女狭穂塚古
墳に埋葬された首長は、大阪の河内平野に巨大
墳を営んだ王権ときわめて緊密な関係をもったこ
とが推測されるのです。その墳丘規模からみても、
南九州の盟主的首長墳とみて相違ないでしょう。
女狭穂塚古墳の被葬者は、生目勢力衰退後の南
九州の政治情勢を再編し、新たにその覇者として
登場したわけですが、女狭穂塚のよきパートナー
となったのが河内平野に大王墳を営んだ王権で
あったと考えられるのです。

ところで表のなかのアミのかかった部分、柄鏡
形の前方後円墳が盛んにつくられた時代の大王
墳は、奈良盆地北部、平城京の北側にある佐紀^{さき}
古墳群に作られていました。佐紀古墳群の大王
墳は1例を除いて相対的に規模がやや小さく、王
権の勢力がやや弱まったのではないかと推測され
るのですが、ちょうどその時期に南九州で柄鏡形

前方後円墳を作る動きがあったのは象徴的です。

5世紀に入りますと、こうしたヤマト王権のやや
混迷した状況を突破するように圧倒的な力をもつ
た大王が登場したと推測しています。それが仲津
山古墳の被葬者です。その被葬者と手を組んで、
生目勢力衰退後、王権から距離を置いた南九州
の政治諸勢力を再編したのが、女狭穂塚古墳に
埋葬された首長ではないか、と推測しています。南
九州の新勢力に王権が梃子入れをして勢力再編
に成功したのではないか。その結果、女狭穂塚古
墳は地域首長として破格の規模ともいえる巨大な
古墳を作ることができた、そのように考えています。
この4世紀の終わりから5世紀前半頃にかけて、南
九州だけではなくて日本の各地域で首長墳系列
の大きな変化が認められます。すでに多くの研究
者が指摘していることですが、王権を担う勢力そ
のものの移動があったか否かは別にして、大王墳
が奈良盆地から河内平野へ移った事実は、単なる
墓域移動に留まらず、王権をめぐる大きな政治
的変動をその背景に想定しようと考えています。こ
のようにみれば、僻遠の地にある南九州の諸勢力も、
王権をめぐる大きな政治的変動に無縁であること
はできなかった、というべきでしょう。

このように古墳時代は、地域首長墳の築造系
列=首長墳系譜の消長からいろいろな政治的動
向を読みとることができますが、あくまでも倭(国)と

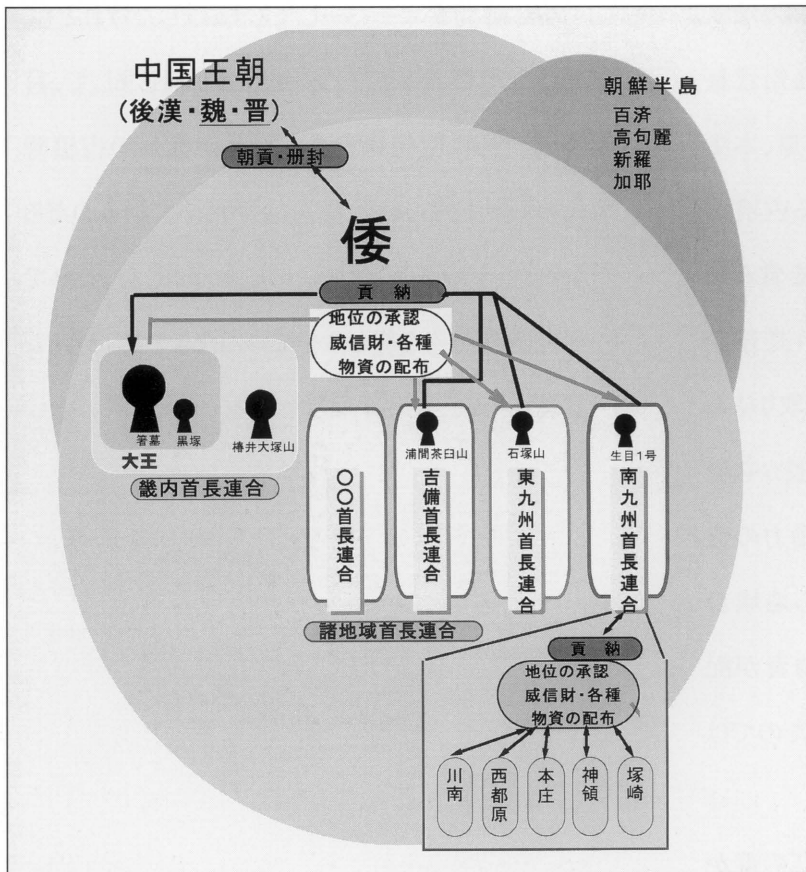
いう政治的枠組み、それも東アジア世界の一員の中で変動する、そのように考えております。

4・5世紀の南九州首長連合とヤマト王権

いま申しましたことから、4・5世紀の倭の王権と地域の諸勢力の関係を整理しますと図14のようにモデル的に図示できるのではないかと思います。図の中央に大きな字で倭(日本)とあります。薄い灰色の範囲が倭の領域だとしますと、倭の全域を統括する首長はまさに大王であります。たまたま

ですが、このモデルは箸墓古墳という日本で最初に巨大な前方後円墳が作られた時代、つまり3世紀の後半をイメージしております。大王墳として箸墓古墳が作られ、そのすぐ近くに一昨年たくさんの鏡が見つかったことで大変有名になった黒塚古墳くろつかがありますが、そういった大王周辺を固める首長層を含んで一つの古墳群を営んでいます。さらに近畿周辺の有力な首長を巻き込んで畿内首長連合という、いわば王権中枢を形成したと考えられます。

その段階のヤマト王権は、倭を代表して中国の諸王朝と外交関係をもち、中国王朝に朝貢を行い、中国の王朝からは属臣として册封を受けた。倭の



【図14】ヤマト王権と地域首長連合の関係モデル

女王・卑弥呼は「新魏倭王」^{しんぎわおう}という位を授けられています。一方、倭の内部でははさまざまな地域で有力首長たちが結集して首長連合を形成したと考えます。南九州の場合は生目1号を盟主とする首長連合が形成されたと思います。そういった地域首長連合と王権との関係は、地域首長連合から王権にさまざまな物資が貢納され、時には巨大な墓づくりのために民の貢納もあったかもしれません。もちろん、それ以外のこともあったと思います。その見返りとして中央の王権からは地方首長の地位の承認、つまり一定地域の支配権の承認や、さまざまな威信財や宝器類、鉄などの貴重な物資が配布されたのではないかと想像しています。

生目1号墳の被葬者を盟主とする南九州首長連合を構成する首長との間、川南や西都原、本庄、^{ほんじょう}神領、塚崎、これらは宮崎・鹿児島にある古墳群の名前ですけれども、そういった古墳群を営んだ下位の首長たちとの間に、王権と地方首長連合がかかわした関係に類似するような関係を取り結んでいたのではないかと思います。地域首長から盟主的首長にさまざまな物資の貢納や労働力の提供などが行われ、そして盟主的首長から地域首長に対しては地位の承認やさまざまな物資が配布された、そのような関係が成り立っていたのではないかと考えております。

最後になりましたが、宮崎市郊外の跡江の静か

な森のなかに、ひっそりと眠っていた生目古墳群、そこに作られたとてつもなく大きな3基の前方後円墳が、いまその眠りから目覚め、南九州の古代史、さらに日本の古代史を書き換える可能性をもってその姿をあらわし始めています。本日私がお話申し上げたことは、これまで語られてきた南九州、宮崎の古墳時代像とはずいぶんかけ離れたものではなかったかと思えます。この基調報告が私の妄想に終わるのか、それとも歴史的事実の一端に触れているのか、現在、宮崎市教育委員会が全力投球で進められている生目古墳群の発掘調査の成果に注目したいと思います。

少し時間がオーバーしてしまいましたけれども、生目古墳群の大型前方後円墳を通じまして、宮崎県、さらに鹿児島県を含めた南九州の古墳時代の政治関係、政治構造はどうなっているのだろうかということを多少お話申し上げました。これで私の基調報告を終わらせていただきます。どうぞご静聴ありがとうございました。

本稿に掲載した前方後円墳の測量図は、図3の右、図4の右、図5・右図の左、図12を除いて、宮崎県総務部県史編さん室編『宮崎県前方後円墳集成』(1997年、図3(右)・図4(右)・図5(右図・左))は、近藤義郎編『前方後円墳集成』近畿編(山川出版社、1992年)、図12は宮崎県教育委員会『男狭穂塚女狭穂塚古墳陵墓参考地測量調査報告書』(1999年)から引用させていただいた。